

心の傷 治す薬は 友の声

末吉 良成さん

敬老の日によせて

「99おおいた人権フェスティバル人権作文集」より抜粋した作文を紹介します。作者は当時、大分市竹中中学校2年生だった女生徒です。

祖父から教わったこと

祖父が亡くなってもう二年になります。今振り返って考えてみると、祖父に悪いことをしたと反省することばかりです。

祖父は、私が小学生の頃から足が悪くてほとんど歩けず、ねたきりでした。ずっとねたきりだったため、痴呆症にもかかってしまいました。その頃、祖母をしていた母は祖父の事を思い、仕事をやめて、家で祖父の世話をしていました。老人ホームに入ってもらおうか、迷ったそうですが、自分の家の方がいいだろうということで決めたそうです。

しかし、その頃小学校四年生ぐらいだった私は、あまり祖父が好きになれず、老人ホームに入ればいいのに、という気持ちがありました。母は、毎日忙しそうに祖父の世話をしていました。母に、「おじいちゃんの部屋にご飯運

んで。」と言われても、嫌がっていつも仕方なく運んで、冷たい目で祖父を見ていました。めんどうくさいし、楽しくないし、関わりたくない。自分には関係ないのに、いつも思っていました。「体をふくのを手伝って。」と言われた時も、「姉ちゃんがやってよ。」と姉におしつけ、自分からやるうとは全くしませんでした。父や母や姉と比べて祖父を差別する気持ちが、私の中にあつたのではないかと思います。

そんな私に母は、「じいちゃんに話しかけてよ。一人できみしいんやけん。」と言いました。いつも笑っている祖父の顔から、そんなことがあるわけない、と思っていました。私は嫌々少しだけ話しかけていました。

私が五年生の頃、近くの清静園への訪問がありました。歌を歌ったり、おじいちゃん、おばあちゃんに肩たたきをしてあげたりしました。私はあるおばあちゃんの担当になり、肩たたきをしたり車椅子を押ししたりしました。そして、たくさんのお話をしました。すると、おばあちゃんの手をぎゅゅとにぎり、「ありがとう。だあれも来てくれんけん、いっぱい話せてうれしかった。」と言いました。この笑顔が素敵なおばあちゃんも、本当はさみしかったんだと思いました。この時初めて、

祖父の気持ちがわかったような気がしました。

その日から私は、少しずつ、少しずつ、祖父と話すようになりました。そしていつの間にか、姉よりも父よりも母よりも、祖父と大の仲良しになりました。今までの自分では考えられないほど、なぜか話すのが楽しくておもしろくなっていました。祖父も前より、もつともつと笑うようになっていました。私は、ほとんど毎日のように学校から帰るとすぐに、祖父の部屋へ行き、話すようになりました。

ある日、冬休みの課題で「お年寄りの絵」というのがあり、祖父の絵を描くことにしました。ベッドに座ってもらい、その前に台を置き祖父の絵を描きました。描きながらもいろいろな話をしました。祖父の小さい頃の話、戦争の頃の話。本当かどうかわからないけれど、どれも聞き入ってしまう話でした。じつと見ている私の顔をみて祖父は少し照れているようで、ずっと笑っていました。その絵を学校に提出したところ、入賞しました。急いで帰って帰り、祖父に説明をして絵を見せました。祖父はとても喜んでくれました。少し笑っているような、その絵と同じ顔をして、「似ちよん。」と力強く、一言いいました。次の日、朝ご飯を祖父

の部屋に持って行くとき祖父はその絵を壁に貼っていました。私は今でもこの事は忘れられません。絵が入賞したことよりも嬉しかったです。

それから、祖父の体は悪くなるばかりで、しばらくして亡くなりました。今考えてみると、祖父が亡くなる前に、祖父と仲良くなれて、祖父を喜ばすことができて本当に良かったと思います。もし、あのまま、私が祖父を冷たい目で見ていたとしたら……、私は一生とり返しのつかないことをしたと後悔していたでしょう。根気強く私を関わらせようとしてくれた母や、本当はさびしいということを教えてくれた清静園のおばあちゃんに感謝します。

祖父を冷たい目で見ていた頃の私は、楽しくなさそうなことには関わりたくせす、祖父の立場になつて考えようともせず、自分勝手だったと思います。自分には関係ない人だと思つたなんて、明らかに差別の心があつたと思います。祖父とのことを心に刻んで、これからもつともつと優しい人間になれるように努力したいです。

（自分の経験をとおして気づきを深めていった姿に私たちも学ぶところがありますね。）